

支援対象者の基本情報

- ・ 年齢・性別：40代・女性（以下C氏）
- ・ 障害種別：精神障害
- ・ 障害者手帳の有無：精神障害者保健福祉手帳 2 級
- ・ 既往歴：双極性障害・アルコール依存
- ・ 家族構成：父・母・弟。父に厳しく育てられ、C氏は長年「父の期待に応えなければならない」「100点でいなければいけない」という思いを抱えて生活してきた。
- ・ 支援前の状況：一般就労をしていたが交際相手や家族との関係性において精神的なダメージを受け、就労継続困難に。また、アルコールやギャンブル依存があり生活が立ちゆかない状態だった。傷害事件の逮捕勾留中に弁護士から相談を受け支援開始。
- ・ 支援前の生活課題：アルコール依存、ギャンブル依存、金銭管理、自殺企図

支援内容

■ C氏が抱える生きづらさ（アセスメント・見立て）

C氏は、「白か黒」「0か100」思考が強く、物事を中庸で捉えることが苦手。支援者に対して「素晴らしいと思う時」と「大嫌いだと思う時」と両極端であり、対人関係が不安定だった。また、真面目な性格で、特に父親の期待に100%で応えようと自分を追い詰める傾向があった。

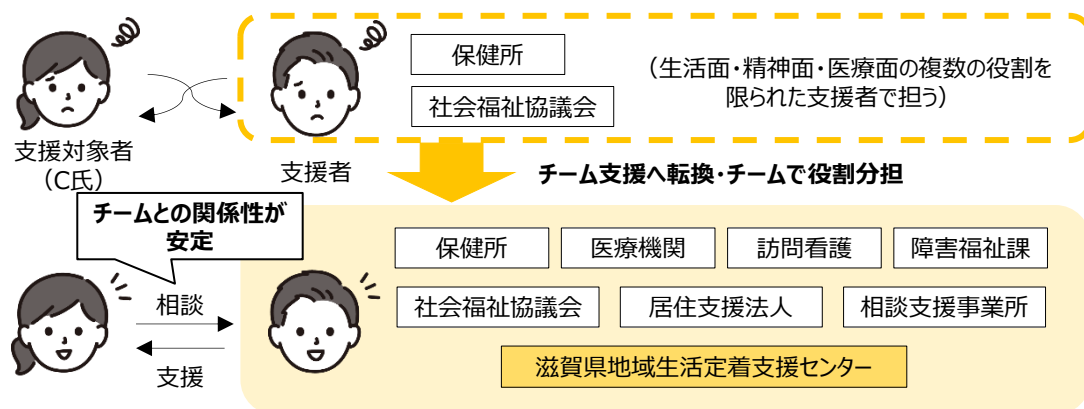
■ 生きづらさを解消するための支援

センターの支援開始前から保健所と社会福祉協議会が支援に入っていたが、特定の支援者（保健師）が複数の役割を担っている状態だったため、チーム支援へ切り替えることを目指した。実刑判決が見込まれる段階で、「帰ってきたときに一緒に支援を続ける体制」を目指し、医療機関を含めたケース会議を実施。出所後は多機関を巻き込みながらチームを拡大した。

■ 今後の支援の方向性

現在は地域の訪問看護や相談支援事業所が支援の中心となり、数か月に1回のケース会議で情報共有を行っている。今後、後方支援としてセンターの関わりを継続する。

■ 支援体制図



センターの基本情報

- ・ 職員数：常勤4名
- ・ 職員の主な保有資格：社会福祉士、介護福祉士、臨床発達心理士
- ・ 有資格者：4名（うち、社会福祉士3名）
- ・ 運営主体：社会福祉法人グロー（2009年受託）
- ・ 受託法人の強み：多領域（高齢・障害・児童）の施設を運営している。
- ・ 地域の特徴：滋賀県は、自立支援協議会の前身となるサービス調整会議が一部地域で先行して始まった経緯をもつ地域であり、障害福祉分野において、関係機関が協力的で連携しやすい風土が形成されている。

円滑な支援を実施するために努めたことは？

- 連携を始めるにあたって、当初は「犯罪歴のある対象者を受け入れてもらえるだろうか」と心配しながら相談に伺っていました。しかし、実際はそのような拒否的な反応はなく、センターから「事実」よりも「事実に至った「背景」情報を丁寧にお伝えしたことで、理解を得られたと感じています。
- 具体的には、センターから支援者に対して、C氏の生活背景（家族関係を含めた成育歴や、対人関係の不安定さ等）を詳しく説明し、単なる「犯罪をした人」ではなく、「困りごとが積み重なった結果」に目を向けてもらえるように心がけました。その結果、関係機関はいずれも状況をよく理解してくださり、連携が円滑に進んだと捉えています。

連携にあたって工夫したことは？

- チーム支援に切り替えるため、既に関わっていた支援者や関係機関に早い段階から声を掛けました。受刑中から医療機関とのケース会議を始め、そこから関係機関を増やしながらチームを広げていきました。ケース会議は、出所直後は週1回や隔週など、比較的高い頻度で行っていました。支援者と連携をする際は、電話や文書だけではなく、時間を取って対面で会話するようにしていました。それは、顔の見える関係を築くためです。こうした取組が関係機関の理解と協力を得る上で重要だったと考えています。

連携による支援で得られた成果・効果は？

- 特定の支援者に負担が集中していた状態から、幅広い専門職が役割を分担するチーム支援へと転換することができました。
- 定期的なケース会議を開催することで情報共有がスムーズになりました。事前に本人の生きづらさを支援者間で共有していたことで、C氏の極端な反応や精神的な揺らぎに対して「チーム全体で受け止める」体制を築けたと考えています。